



1月号

平成9年1月1日

発行/編集

岡崎市教育委員会

クス クス

廊下を歩くと

笑い声がついてくる

ゆっくり後ろを振り向くと

子どもが一人 ニコッと笑う

前を向いて歩き出す

クス クス クス クス

笑い声がついてくる

パツと後ろを振り向くと

今度は二人 ニヤツと笑う

前を向いたふりをして

すぐに後ろを振り向くと

子どもの動きが一瞬止まる

ブツ ハハハハハ

顔いっぱい口を開け

お腹を抱えて笑い出す

三人一緒に笑い出す

〈楽しいね〉



(放課はお気に入りのチャボと — 上地小)

話の内容は、日常の他愛もない雑談であり、それ自体はどうというところでもない。しかし使っている言葉が乱暴なのである。相手に対して「おい」と呼びかける。「食う」だし、「うまい」である。語尾には「だよな」を使う。

夏休みのある日、中距離普通列車に乗っていたら、このような言葉を



使う女子大生四人組と乗り合わせた。明るく、嫌味もないし、声高にもなく会話を楽しんでいる。「君も」と言ったり、「こいつも」と言ったりする。「がんばれよ」と言ったりもする。一人だけだが、「おれ」と十回以上も言った。

話は突然変わるが、この私でも教壇に立つことがある。医師以外にも

医療にたずさわるさまざまな職種がある。これらを養成する専門学校での講義である。彼ら、彼女らには、卒業直後の国家試験が待ちかまえている。だから講義を熱心に聴いてくれる。頭が下がるくらいだ。私語をする者なんかいない。その辺の大学生や短大生に見せたいくらいだ。ところがここ何年かの間に大いに

—教育随想—

母親の役割 そしてそれを補うのは



愛知県岡崎保健所所長

鈴木 亮而

さま変わりしてきた。最近かかわった女子大の某校では私語が多く、毎週の講義毎に名指しで注意しなければ、静かにならないのだ。ひどい時には九十分間に七回もそれをする有様である。同じ日に二度も名指しされる剛の者もいた。

子どもに言葉やマナーを身に付けさせる責任は、ひとえに親、特に母

親にある、と私は考えている。ところが言葉遣いを教える能力もないし、社会生活におけるマナーへの関心も持ち合わせていない母親は、世の中にはいくらでもいる。親となるための免許制度が必要だとすら、私は常日頃考えている。(本当にそれをすると、日本はたちまちにして人口減となり、この国自体が消え去ることになる。だから本気で主張することはしない。ご心配なく。)

これら無免許(?)の母親から、乳幼児期に言葉遣いやマナーを学ぶことなく小学校の門をくぐる子どもたちは、現実にはかなりあるわけだ。こういった「欠陥児」たちを現に矯正する役割を果たしているのが、義務教育に携わる教員の方々であると認識している。ところがこの務めを行っている教員も一部にはいる。それどころか悪い方へと助長するような言動をとる教員すら見かける。かくして幼児期のみならず、義務教育期間中もみごとに関門をかいぐり、完成(?)したのが冒頭にご紹介した女子大生諸君というわけであらうか。

(すずき りょうじ)



心のふれあう教育

岡崎小学校長

石川 昌文

山田洋次監督の映画「学校Ⅱ」を現職教育で鑑賞に出掛けた。養護学校の生徒と教師との心のふれあい、葛藤の中に、まさに一対一の教育が推し進められていく。暖味さは通用しない真剣勝負である。映画とはいえ、体当たりでぶつかる先生の姿に心を揺さぶられたひとときであった。

私たちの義務教育の学校では、普通学級において、教師一人で、多くの児童生徒を相手に教育活動が進められている。ややもすると教師側に子供との一対一の関係の意識が薄らぎ、個々の子供への対応がお座りになる。この意識が恐い。

今大切なことは、心の教育者としての自覚である。個々の子供の人間性を理解し、その子の持ち味、願いや夢を知る努力を怠らず、さらに悩

ふるさとシリーズ

この人に聞く



日本貝類学会会員

山田 栄蔵 氏

山田さんと貝との出会いは、戦後三谷の水産高校に勤めたときだった。漁の後に残った掃きだめをさばくと、珍しい貝が見つかり興味を持つようになった。その後、三重、岩手、石川の水産高校で教鞭を執る傍ら、趣味で貝を採集された。当時は貝についての研究者が少なく、文献も詳しいものがなかったため、神田の古本屋で調べたり、学会にも入会されたりした。

退職して岡崎へ来てからは、時間も取れるようになりました。それまでは海の貝でしたが、退職してから陸の貝をやるようになりました。」

当時は岡崎に陸貝研究者がほとんどいなかった。豊橋市出身の山田さんだったが、岡崎の地図を頼りに約三十数か所採集に歩き、分類整理された。

平成三年には学会の推薦により、環境庁へ岡崎の陸産貝の調査結果を報告された。それを全国の資料としてまとめた『動植物分布調査報告書』が、今年、山田さんの手元に送付されてきた。

「図鑑もまだまだ固まっていないんです。特に陸産貝については、種・亜種の分類が面倒なんです。だから専門家や文献から得た知識で分類していくこともありますね。」

採集に出かけるときはピンセット、フィルムケース、ルーペ、野帳が必需品であるそうだ。車を運転しない山田さんは、自転車やバスで各地を巡られている。

「雨が降った次の日がいいですね。冬は冬眠のため見つけにくいので、四月から十一月の、雨の後や湿度の高いときがいいです。出かける

のをちゅうちよしているのだめです。」

「木の葉を静かに一枚一枚めぐります。日に当たると貝がきらっと光ります。見つけたときはやっただという感じですね。」

海産貝に比べ、決して派手さのない陸産貝。それを見つめる山田さんの目はこの上なく優しい。このような地道な研究こそが、未来の自然環境を守っていくために、欠くことのできない活動なのだということを、改めて教えられたような思いがした。

氏名 やまだ えいぞう
生年月日 大正十一年八月十二日
住所 連尺通 二丁目 二十四番地



みや困り事などを聞きとめ、心を受けとめる寛容さをもつことである。言い換えれば、子供一人一人がその担任に心の温かさを感じ、安心して心を預けてくれているかということへの自戒である。

人間教育とか、個々の子供を大切にしたい教育を叫びながら、教師一人一人が脱皮することを怠っていない。

ときには、一人の子供の指導のまじりに気付き、子供に教えられ、そこで脱皮する。脱皮することに素直になれる人間こそ、子供への姿勢に新鮮さ、子供と同じ目の高さが保たれることと私は信じる。まさに、その子供に出会ったことによつて気付かせてもらったのである。子供に学ぶ師の姿がそこにある。

職員間も然り。同僚の頑張りに百パーセントの賛辞を贈り合うことのできる仲間であるかが問われる。自ら常に何かを追求する心をもって生きていく人間は他人の努力への素直な賛辞を忘れない。この職場にあつて、職員が自身の存在感を自覚し、味が出せる雰囲気づくりがされているか。職員の頑張りに真のエールを贈っているか。校長としての私個人への戒めである。

岡崎の牛物語

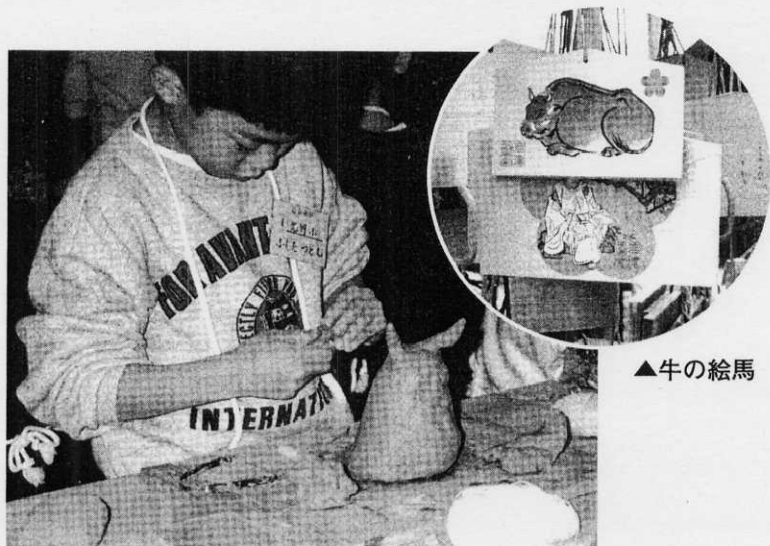
一九九七年、丑年の幕開けである。
太陽の城での造形教室では小学校の子供たちが
牛の土鈴作りに取り組み、神社では人々が一年の
願いを絵馬に託す。



切り絵 山田利一氏

昔、牛は

農家の大切な働き手であった牛は、牛転うしろび
(橋目町・戸崎町)、牛飼うしかい(奥殿町)、牛落うしかち
(真福寺町) 等の字名に残り、人々の感謝の
心が牛頭観音(岩戸町・駒立町)となった。
また、「わずかに残った滝壺の水で牛に似た
巨岩の背を洗って雨乞いをした」という
われが「牛岩の瀧」に残る。



▲牛の絵馬

▲牛の土鈴作り (太陽の城)

▼牛岩の瀧 (山網町)



天神さんの牛

天神さんにはなぜ牛なのだろうか。

一般には菅公の生まれ年が承和十二年六月二十五日、つまり乙丑に当たっていたからという。

天満宮に近い青木橋のたもとの牛のレリーフは、往来する人々の目を楽しませてくれる。

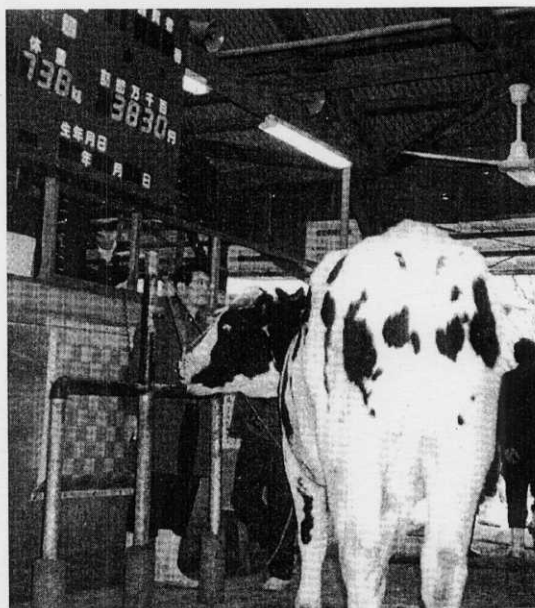
◀牛のレリーフ (青木橋)



▲岩津天満宮の撫牛

愛知県は全国第六位の搾乳量を誇り、岡崎市では現在、乳用牛、肉用牛合わせて二千頭ほどが飼養されている。
岡崎中央家畜市場は県下唯一の牛の競りを執り行うところ。場内には、競りの勇ましい声が響きわたる。

今、牛は



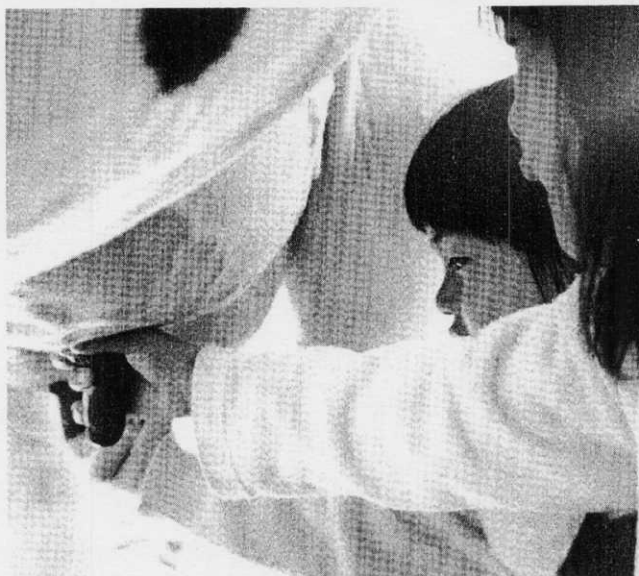
▲岡崎中央家畜市場の競り

牛の未来

近年は、し尿処理・後継者・採算などの面、さらに二〇〇〇年からの乳製品の自由化が、飼養頭数の減少に追い打ちをかける。

一方、バイオテクノロジーの先端技術を導入するなど、知恵を絞り出してよりよい牛作りを目指している。

愛知県種畜センターや県農業大学校での畜産フェスタや農大祭は、地域に牛や豚などとのふれあいの場を提供している。



▲畜産フェスタ (県種畜センター)

周囲に家畜の姿がなくなった昨今、牛が写生会の対象になる意味を考えるまでもなく、あの大きくて優しい牛の姿から、子供たちが感じ取るものは大きいはずである。



モルダウの流れ

常磐中学校

杉浦 雅己

体育大会が終わっても、まだ一枚も賞状がない。合唱コンクールこそは。そんな思いが教室にふくらみ始めていた。

「指揮者をやりたい。」

真っ先に手を挙げたのはA

男。人に優しいが、気分屋であり勉強にもあまり意欲がなかった彼。初めは当惑したが、A男の意欲を認め伸ばす好機だと思

い、指揮者を託すことにした。「先生、去年の合唱のビデオ、ダビングして。」

「七時から朝練やるぞ。」

「連絡網を回して。日曜の午後に練習やろう。」

A男の精力的な動きに呼応し、学級の歌声も響き合い出した。

数日前から体調を崩していた

A男は、当日、発熱をおして舞台に立った。結果は優秀賞。念願の賞状は手中にしたが、最優秀賞は二年生に。A男の目標だった指揮者賞をも逃した。受賞曲発表の番になっても、失意からかA男はしばらく動こうとしなかった。

控え室に戻ると、数人の目に涙が光っていた。賞状は手に入れたのだらう。日記からは、A男の努力を認める声が寄せられた。A男の指揮は、学級の心を豊かで大きな流れに変えた。「モルダウ」の流れのように。



音楽の心

小豆坂小学校

永田 操

カメラを手に温かい眼差しで子供たちを追う先生の姿を色々な大会でお見受けしています。子供たちに対する先生の変わらぬ姿勢を感じます。

新任としてお世話になった六北小では、先生が中核となられ、音楽研究が盛んでした。

先生のピアノやリコーダーの音色に魅せられ、多くの先生方が楽器を手近に置き、演奏を楽しんでいました。先生の演奏は、私たちが本来持っている音楽を愛する心をゆさぶり、目覚めさせてくださいました。

本質がよく分からず、細かいことを質問する私に、「技術が先ではないんだよ。こんな音を出したいという願



いをかなえるために、運指があり、発声法があるんだよ。」

と、先生の言葉や行動から音楽の心を少しずつ学ぶことができました。そんな中から実感として理解したことは、子供のいい表情を求めていけばいいんだということです。

先生から学ばせていただいたことをいまだに生かしきれませんが、子供とともに音楽を楽しめるのは先生との出会いのお陰です。

吸収力のある操先生

大樹寺小学校長

林 和泉

あの頃（昭和四十年代）は、高学年の音楽は音楽専科に任せるといのが一般的でしたが、音楽こそは、人づくり、学級づくりに生かせる教科であり、担任に勝る指導者はいないと考えていましたから、

六北小では、全学級担任が音楽を担当しました。

このことで学校中の意識が統一され、先生も子供も生き生きとした音楽への取り組みが実現したと自賛しています。そうした空気の中へ入って

こられた操先生は、大変失礼な言い方ですが音楽教育の面では、まるで白紙のような先生でした。

白紙のような心で、音楽や子供に向き合ってきたので、音楽の本質に素直に入っていたのではないのでしょうか。

技術にこだわっていたら、子供は伸びていけないことになり、先生自身が音楽に感動すれば、子供もその音楽を好きになり、感動がより深まれば、技術はあとからついてくるというのを感じとってくれました。一人一人の子供が主役

となる音楽の実践を「ひとりひとりが伴奏者」という論文にまとめるなど、先生の成長ぶりに感心させられました。先生のたゆまぬ情熱で、さらに飛躍されることを期待します。

お知らせ



◆教育文化賞

(個人)

◆高木宏子氏(五十七歳)

昭和五十五年より手織三河木綿の収集に着手し、機織り機やその技術の研究、綿や藍の栽培等に取り組んだ。三河木綿保存会を発足させ、活動を続けている。

◆山本純子氏(六十歳)

昭和五十八年以降、本市への外国人訪問者のホームステイを積極的に受け入れるとともに、日本語教室も実施してきた。昭和六十年より外国語版の市政だよりを自主発行している。

(団体)

◆交通安全協会大門分会

昭和五十五年発足以後、たより「交通安全だもん」の発行、交通教室の実施等、

精力的に交通安全意識の高揚に努めてきた。学区を通るドライバーにも「しめ縄

広報活動」を展開している。

◆朗読ボランティア虹の橋会

昭和四十九年に設立以後、視聴覚障害者への支援として図書館の蔵書の録音化や本の朗読活動を推進した。市政だよりや市議会だより、身障者新聞等も録音して提供している。

◆岡崎市立矢作北小学校雅楽部

平成三年発足以後、学区で雅楽を伝承している長瀬楽人会の指導を受けながら曲の会得に努めている。練習成果の発表や各種の出演等、継承・演奏活動を展開している。

◆一九九六年視聴覚教育賞

教育奨励賞(学校教育部門)

美川中学校

◆小中学校作品コンクール

・数学科の部

文部大臣奨励賞

六ツ美北中三年 杉浦千秋

永井里美

◆全日本健康推進学校表彰

すこやか大賞(中規模校)

山中小学校

◆第十五回愛知県中学生バレーボール新人大会

・男子

優勝 矢作北 中学校

・女子

準優勝 六ツ美北中学校

◆第四十一回ソニー教育資金

贈呈校

優秀校 六ツ美北部小学校

藤川 小学校

新香山 中学校

竜海 中学校

甲山 中学校

城南 小学校

小豆坂 小学校

◆第三十八回岡崎市中学生英語スピーチフェスティバル入賞者

・二年生の部

六ツ美北 中島ひで美

新香山 水川 舞

葵 小林麻衣子

竜海 柴田麻衣子

・三年生の部

甲山 武田 祐果

竜海 柴山祐美可

竜南 倉橋麻里奈

美川 深津由布子

矢作北 永野 裕子

六ツ美北 池中 建介

◆優良PTA文部大臣表彰

岩津中学校父母教師会

◆平成八年度健康優良児童生徒優秀賞

〈小学校〉

大門 小柳龍一 連尺 吉見織衣

六名 長坂淳志 矢東 安藤絃子

三島 牧原史典 奥殿 柴田祐佳

大樹寺 中山 満 北野 郷原香菜

梅園 梶谷直弘 矢北 岩元小麻紀

〈中学校〉

矢作 北浦 誠 葵 塚谷千尋

南 近藤正和 福岡 本多慶子

岩津 水越常之 矢北 伊藤恭乃

竜海 内田直将 竜海 荻野一恵

六ツ美 越山智仁 南 多田侑香里

◆平成八年度よい歯の児童生徒優秀賞

〈小学校〉

竜谷 水野智司 男川 青山加奈

大門 市川裕和 大樹寺 甘茂生望

大樹寺 金光壽泰 城南 テヤクリエ

藤川 南 彰範 三島 吉本羽良々

城南 中谷 剛 六名 藤枝由佳子

〈中学校〉

美川 三浦忠司 南 大河内久美

南 小橋元気 葵 青木優子

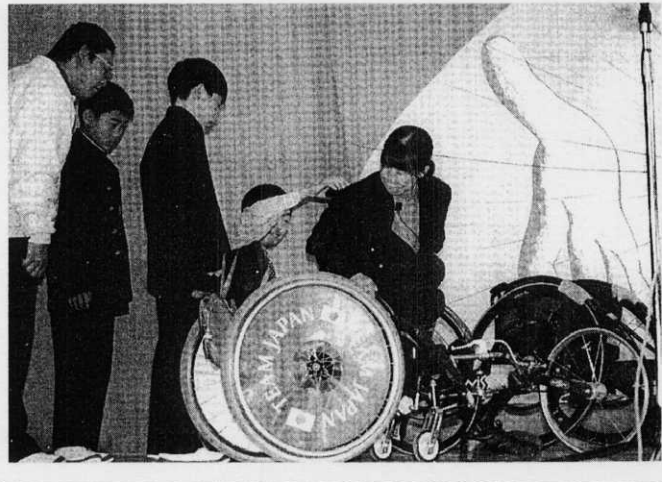
竜海 酒井恵佑 矢北 永野裕子

竜南 廣永 良 美川 林田麻里江

北 川野季之 北 齋藤 望

知山アガ 矢作北中

生徒会が主催する文化祭は、今年度から800mのコースを走る。夢・友・生が合った。





豊嶋典明氏 蔵

昭和四十七年、岡崎市算数・数学部の手によって、『算数指導一問一答』の第一号が発行された。

当時、部長だった塚本氏の言葉に、「この本は、毎日の算数学習指導の中で生じた極めて初歩的とも言うべき問題について、解説や算数部としての見解をまとめたもの」とある。編集の仕方もこの言葉のとおりで、小学校で算数を専門にしている先生方から様々な質問を出していただき、それを部会で検討して解説をしていく方法を取っている。

『算数指導 一問一答』

質問の内容を見ると、「数字の正しい読み方は」「÷の正しい書き順は」など普段の授業の中で、疑問に感じてものが多くみられる。

この『一問一答』は、第八集まで出され、昭和五十五年に、加除修正されて、『算数・数学一問一答』にまとめられた。そして、翌年『算数指導の疑問これですっきり』（黎明書房）へと至るのである。現在は、算数の指導法に目を向け、日々の授業で使われた工夫が、『アイデア集』にまとめられて活用されている。

・表紙写真
・表紙詩
・カット

上地小 浅井考司
上地小 前原照世
北地小 野村光



- *木のいのち 木のころ 西岡 常一
草思社 ￥1400
- *前例がない。だからやる 樋口廣太郎
実業之日本社 ￥1000
- *伊達公子 自分のための生き方 甘露寺圭郁
三笠書房 ￥500
- *吉本興業のへそ 中野 博季
勁文社 ￥1100

- *教師 自己の伸ばし方 関根 正明
学陽書房 ￥1500

わたしたちが自分を伸ばしたいと考えるのは、自分のためというよりも、子どもたちのためを考えているからである。

本書第2編は、次のような内容である。

- (1) 子どもを受容する能力
- (2) わかるように話せる能力
- (3) やる気を起こさせる能力

この見出しでわかるように、子どもを伸ばすために教師にはどのような態度・知識・技能が必要かを、極めて具体的に述べている。

尾を振って草を食む牛。その大きさに圧倒されながらそっと近づく。昔は役牛としてどの農家でも貴重な存在だった。しかし、今ではふれあう機会はほとんどない。その大きな目には哀愁を帯びた優しさがある。ふと、昔遊んだ野原が思い浮かんだ。

シ オ

ス ア

あくなき探究。陸産員の存在は知られていても、その研究はまだ始まったばかりである。わずかな形や模様の違いを手掛かりに、ルーペを使って一つ一つ分類していく山田さん。そこにはこの小さな生き物を通して、自然と対話している姿があった。

「斜体の数字は、どれくらいの傾きで書かせたらよいでしょうか。」そんな素朴でかつ基本的な疑問に答えようとスタートした『算数指導一問一答』。基本だからこそ難しく大切な研究。新任であった私にとって、大切な指導書の一つであった。

スタートした九十七年。きのうと同じ出来事にも違った気持ちで味わう。何をやるにも、初をつけるが、初める、というのでもいい言葉だ。書き初め、弾き初め。心を新たに立ち向かうとする、平生とは違う精神のほずみのようなものが感じられる。